特集 ふるさと探訪 PART 120

やすらぎの発信地　さかき
～花き栽培のあゆみ～

はじめに

バラのまち・さかき。坂城町を紹介するときに、特徴の一つとしてよく使われているフレーズです。町内ではあちらこちらでバラの花を目にします。毎年開催しているばら祭りも、昨年二〇回を数えすっかりお馴染みになりました。バラがたくさん植えられているから「バラのまち」なのだとお思いの方も増えているようです。実はそれだけではありません。バラが植えられた背景には、町の農業の歴史が関係しています。今回は、花き栽培の歴史を探訪しましょう。

戦前の花づくり　キク

大正十五年、坂城町農会・中之条村農会・南条村農会と埴南農蚕学校(坂城高校の前身)合同による第一回農産物品評会が同校で開催されました。出品物は第一～七類に分類され、第七類に「参考品花卉、盆栽、其他」とあります。主流の穀類や蔬菜類に比べ参考品扱いではありますが、この頃には花き栽培が始まっていたことがわかります。同年、上五明でキク栽培を始めた人があり、年々栽培者数が増えていきました。

昭和恐慌で養蚕偏重の経営が見直され、多角経営によって現金収入を増やす努力がなされました。果樹のほか、切り花・球根・採種などの花き栽培が広がっていき、昭和十三年には村上村はキクの主要産地となっていました。信州のキクは、夏場の花の少ない時期に都市部へ出荷され、色鮮やかで日持ちがよいと人気だったそうです。通常、キクの出荷時期は秋ですが、これを早めると高値で取引されるため、県内の農家はシェードカルチャー(遮光材を用いて日照時間を調節し、開花を促す)を導入し、八月中から大量に出荷することに成功しました。鉄道による輸送もこのころ始まりました。

村上では戦後になってシェード栽培が広がったようです。遮光材はよしずに紙を貼りコールタールを塗るもので、農家の手製でした。中にはよしずから手作りする人もありました。これを夕方に掛け、朝に外すことを繰り返します。収益が上がる一方、労力も相当必要でした。昭和二〇年代後半には夏に強い新品種の開発が進んだこともあり、シェード栽培は下火になっていきました。

南条や四ツ屋では、戦後になってキクを中心に花き栽培が始まりました。昭和二十八年にキク栽培は最盛期を迎えます。

戦後の彩り　カーネーション

第二次世界大戦開戦後、国による食糧統制が厳しくなり、太平洋戦争が始まると食糧確保体制のため農地での花き栽培は行えなくなりました。終戦翌年からキク、アスター、グラジオラス、ユリなどを栽培する人も出始めましたが、なお食糧難は続いていたため水田での花き栽培ははばかられ、畑の空いた場所や果樹の間などで花づくりをしていました。

昭和二十二年になると養蚕より収益があることから栽培者は増え、二十三～二十四年には村上でカーネーション、南条で小菊やカーネーションの栽培が始まりました。当初カーネーションの栽培者は少数でしたが、病害虫に悩まされながら試行錯誤を続け、徐々に栽培技術を確立していきました。次第に栽培者は増加し、昭和三〇年にはキクからカーネーションに転換されていきます。

村上では、昭和二十八年に鉄道からトラック輸送に出荷手段を切り替えました。千曲川の増水で橋が流失すると、花を駅まで運ぶために別の橋へ迂回したり、頭の上に抱えて川の中を歩いたりする苦労がありましたが、トラック輸送ではその心配がなくなりました。

バラ公園からしなの鉄道を望む

高度経済成長と共に　バラ

神武景気只中の昭和三〇年、村上の塚田利次さんがバラの露地栽培を試験的に開始しました。華やかで高級感のあるものが好まれる時代に、バラの需要が増えると考えたのです。しかし、当時はバラの露地栽培の産地は国内になく、栽培は難しいといわれていました。実際この年の試作はうまくいかず、翌年神奈川県の先駆者の農園の実習生となり、栽培技術に加え花き業界や流通についても学びました。

三十三年から栽培が本格化し、市場からは見込みどおり多くの出荷要請が来ました。市場からの要望に応えて品質向上にも努め、高単価で取引をすることができました。

塚田利次翁顕彰碑

三十五年ごろには、キクから転換しバラ栽培を開始する仲間も増えてきました。それまで苗は購入していましたが、自家生産によりコストを下げ、経営の安定化と産地としての定着を目指し、接ぎ木技術を習得しました。二月に仲間で集まり、十日間ほど接ぎ木作業をすること五～六年、バラ栽培は軌道に乗りました。日本ばら切花協会主催の品評会で、村上のバラは多数入賞するまでになったのです。

花き栽培全盛期

昭和四〇年には南条でもバラ栽培が始まり、四十五年には町におけるコメの生産額を花き栽培の生産額が初めて上回りました。四十八年に村上に花き団地ができ、大型ハウスを導入したバラ栽培が進みました。五〇年代はカーネーションもハウス栽培に転換し始め、出荷可能期間が伸びて生産量が上がりました。

五十四年に坂城町は日本一のバラ産地となり、五〇～六〇年代はトルコギキョウの生産も盛んで、上山田町と共に全国的主要産地となりました。まさに花き栽培の全盛期を迎えたのです。このような中、昭和六〇年にバラが町花に制定され、名実ともに「バラのまち」となりました。

ところがその後、国内の他地域でも花き栽培が始まり、海外からも切花が輸入されるようになるなど産地間の競争が激化したことに加え、平成に入りバブル経済が崩壊して花の値段が下がり、花き栽培は苦しい状況になりました。高齢化と後継者不足により栽培人口も減少していきます。

バラ公園開園とばらサミット

そのような折、中之条にバラ公園を整備する計画が立ち上がりました。平成十三年に造成工事、バラ植栽と事業が進み、同年にはバラ生産者を中心に「薔薇人の会」が設立されました。十四年に「さかき千曲川バラ公園」として開園し、十七年にはオーナー区画が拡張され全町的な取り組みへと発展しました。十八年に第一回ばら祭りが開催されると、町内各地にバラの愛好団体が生まれ始め、バラを植栽した花壇がみられるようになります。二〇年の全国ばらサミット開催時には、愛好団体はさらに増え、現在のようなバラがあふれるまちになりました。

おわりに

平成二〇年に『千曲の郷の花づくり　坂城町花き栽培のあゆみ』が刊行されました。刊行会長の塚田利次さんは発刊あいさつで次のように述べています。

「遮光栽培のキク、全国にさきがけて露地栽培され、やがてハウス栽培に移行していったカーネーション、全国初の花き団地として栽培されたバラ、その後も栽培されている美しいトルコギキョウなど、市場を通して全国各地の家庭や職場に届けられました。その意味で、坂城町は、日本の人々へのやすらぎの発信地でありました。」

まちじゅうに咲くバラは、わたしたちのふるさとから日本各地にやすらぎを届けていた記憶を伝えています。

（本間　美麻）

ばら祭りでにぎわうバラ公園